
言語研究センター共同研究

日本語・韓国語教育における漢語動詞の研究

高木南欧子／尹亭仁

韓国語と日本語は、文法構造や語彙の類似点が多く、相互に学習が有利な言語と言われている。しかし、その類似性ゆえに母語の干渉を受けやすく、母語の影響から生じる誤用が見過ごされる傾向にある。日韓両言語には共通して漢語が存在するが、意味・用法の違いに関する研究の積み重ねは、未だ十分であるとは言えない。効率的な学習デザインを考える上でも、両言語における漢語の対照研究や、言語活動において必要とされる漢語の異なり語彙数の調査などといった全体把握のための基礎的な研究が必要である。

2014年度に行った漢語動詞の調査では、韓国語、日本語、それぞれを基準とした場合の対応関係を見た。韓国語の2字漢語+하다(スル)が、そのまま日本語において2字漢語+スルにならない漢語動詞を見ると、不一致のタイプは6つに分類されることが明らかになった。また、その中でも、日本語には2字漢語+スルの形が存在せず、名詞形しか存在しないことによって意味の不一致

が起きているものが全体の約4割を占めていることが分かった。反対に、日本語の2字漢語+スルが、韓国語において2字漢語+하다(スル)にならないケースを見ると、不一致のタイプの分類は8つであった。言語教育の現場においては、誤用を防ぐために、「正の転移」「負の転移」につながる漢語動詞のリストの作成、各レベルにおける習得目標語彙数の策定、辞書などの見出し語の選定および提示の仕方の再考、コロケーション情報の提示などが必要であるとの提言を行った。

また、遂行課題の難易度と使用漢語の語彙数に関しては、韓国語を母語とする日本語学習者の発話の調査分析を行った。そこでは、上級レベルの話し手は、中級レベルの話し手より使用漢語数が多いことが観察され、使用漢語におけるGuiraud値は、上級レベルの話し手の方が数値が高い傾向にあり、より多くの語彙を習得していることが確認された。各レベルにおいて使用された漢語の特性を、抽象度や話題との親密度などの観点から分

析した結果、語彙の理解は、直ちに語彙の運用に
つながるのではなく、学習や環境による影響が話

し手に与えられた結果、運用につながる可能性が
あることが示唆された。
